The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	黄州時代の蘇軾における悲哀表現 ： 「詩成却超然、老涙不成滴」を手がかりに
Author(s)	趙, 蕊蕊
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2013, 47, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54410
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

黄州時代の蘇軾における悲哀表現

――「詩成却超然、老涙不成滴」を手がかりに――

趙　蕊蕊

キーワード：蘇軾／超然／悲哀

一　「冬至日贈安節」詩について

元豐二年（一〇七九年）、蘇軾は王安石の新法を諷刺したことにより黄州に左遷される。元豐四年（一〇八一年）の十二月、蘇軾の甥（従兄の子）[1]である安節は、科挙に落第して蜀へと帰郷する途中、黄州にいる蘇軾のもとを訪ねる。その時に蘇軾が作った詩に「冬至日贈安節」（『合注』巻二一）[2]がある。詩の全文は次のようにいう。

我生幾冬至　　我が生　幾たびの冬至なるか
少小如昨日　　少小　昨日の如し

當時事父兄
上壽拜脱膝
十年閲彫謝
白髪僱衰疾
瞻前惟兄三
顧後子由一
近者隔濤江
遠者天一壁
今朝復何幸
見此萬里姪
憶汝總角時
啼哭爲梨栗
今來能慷慨
志氣堅鐵石
諸孫行復爾
世事何時畢
詩成却超然
老涙不成滴

當時　父兄に事(つか)え
壽を上(たてまつ)り　拝して脱膝す
十年　彫謝を閲し
白髪　衰疾を僱(まね)く
前を瞻(み)れば惟だ兄三ありて
後を顧みれば子由の一のみなり
近き者は濤江を隔て
遠き者は天の一壁
今朝　復た何ぞ幸いなる
此の萬里の姪を見る
憶う汝が總角たりし時
啼哭　梨栗の爲にす
今來　能く慷慨し
志氣　堅きこと鐵石のごとし
諸孫　行くゆく復(ま)た爾(しか)り
世事　何時か畢(おわ)らん
詩成りて却って超然たり
老涙　滴を成さず

まず冒頭の四句では、これまでの歳月を回想する。父兄に礼を尽くし、お辞儀のため足が疲れたことを覚えていると述べる。続いて、詩人の視点は現在の状況に転ずる。故郷に帰ることができぬまま、役人生活の浮沈を経て、今やすっかり老い衰えてしまった。兄弟は自分も含めて五人しか残っておらず、皆遠く離れているので、会うのは極めて難しい。その中、十年ぶりに甥の安節に会えたことは、なんと幸運なことだろうと感嘆する。そして、梨と栗をほしがって泣いていた安節の子ども時代を思い起こしつつ、その成長ぶりを喜び、他の孫たちもいずれは立派に成長するであろうことから、悠然たる時の流れに思いを致す。以上、回想を交えながら自身の現状について述べてきたのを受けて、最後の二句に「詩成りて却って超然たり、老涙 滴を成さず」と胸中の感慨を詠出する。拙論で特に注目して考えてみたいのは、この二句に表現された蘇軾の心情についてである。

この二句はどのようなことをいうのか、従来の解釈は揺らいでいる。その揺らぎは主に「超然」と「不成滴」の二つの語による。「超然」は、大きくは「俗世を高く超え出たさま」と「悲しみ、がっかりするさま」との二つの意味に分かれる。「不成滴」も、涙が「滴をなさない、つまり流れない」と「滴とならず、線状の流れをなす、つまり大量に流れる」との二つの状態に用いられる。この揺らぎによって異なる解釈が生まれる。例えば、久保天随等註解『蘇東坡全詩集』は、「詩成りて却って超然として気が強い、故に老涙滴るの弱い念は起こらない」[3]――世間の煩わしさを離れて強い気概を持つに至ったため涙は流れないと解する。しかし、張志烈等主編『蘇軾全集校注』の解釈はこれとは大きく異なり、「超然」については「惆悵貌（悲しいさま）」、「不成滴」については「言成線下流、極言傷感之甚（涙が線のように流れることをいい、悲哀の深さを強調している）」[4]という。

蘇軾「冬至日贈安節」詩の最後の二句は、いったいどのように理解するのがよいのだろうか。この二句に詩人はど

のような意味を込めたのか。以下、安節と交わした詩を中心に取りあげながら、黄州在任時の蘇軾の詩における悲哀感の表現方法について検討してみたい。

二　「姪安節遠來夜坐三首」詩について

「冬至日贈安節」詩を分析するにあたり注目すべき作品が二つある。一つは「姪安節遠來夜坐三首」（『合注』巻二二）と題される詩、「冬至日贈安節」詩と同時期に作られたと考えられる。もう一つは「記與安節飲」（『文集』巻七一）と題される題跋、やはり同時期の作である。

題跋「記與安節飲」は、夜に安節と酒を酌み交わしたことを述べて次のようにいう。

元豐辛酉冬至、僕在黄州、姪安節不遠千里來省、飲酒樂甚。使作黄鐘『梁州』、仍令小童快舞一曲、醉後書此、以識一時之事。（元豊四年の冬至、黄州にいた時、甥の安節が千里の遠方から訪ねて来て、共に酒を飲み楽しんだ。黄鐘調の「梁州」を作らせ、小童に快舞を一差し舞わせた。酔いにまかせてここにその楽しい一時を書き残すことにした。）

右の文中に「飲酒樂甚」とあるが、この語がかえって詩人の悲哀感を表現しているという指摘がある。『御選唐宋詩醇』巻三七には、「姪安節遠來夜坐三首」について述べるなか、次のように指摘する。

家常語愈淺愈眞。安節以下第來黄州、『大全集』雑説有「姪安節遠來、飲酒樂甚。」以識一時盛事之言。此三詩但作喟歎、未見其樂也。然以謫居岑寂之中、有骨肉遠來聚首、秉燭寒宵、絮語不倦。悲之所發、即其樂之所形。此與「冬至日贈安節」詩所云「詩成却超然、老涙不成滴」者、情懐約略相似。（日常の言葉は浅ければ浅いほど真実に近づく。安節が科挙に落第して黄州に来たことについて、『大全集』の雑説には「甥の安節が遠方から訪ねて来て共に酒を飲み、まことに楽しかった」とあって、そのひとときの盛事を記している。一方、この三首の詩（「姪安節遠來夜坐三首」）は詩人の悲哀を歌ったものばかりで、喜びは全く見られない。しかし、貶謫され孤独な時に、親戚が遠方から訪ねて来てくれ、寒夜に蝋燭を灯して、積もる話は尽きることがない。ここでは悲哀の発露が、即ち詩人の快楽の表れともなっているのである。これは「冬至日贈安節」詩にいう「詩成却超然、老涙不成滴」と、その気持ちにおいてはほぼ同じである。）

ここに見える「悲之所發、即其樂之所形」という説明は一見矛盾しているかのようにも思われるが、「悲」と「楽」とが複雑に絡み合い、葛藤する蘇軾の心情をきわめて的確に捉えたものといえる。

『御選唐宋詩醇』の右の指摘によれば、「姪安節遠來夜坐三首」は、その悲哀感の表現において「冬至日贈安節」詩と似通っているという。以下、この三首について検討してみよう。まず第一首には、安節との夜坐をうたって次のようにいう。

南來不覺歳崢嶸　　南來　歳の崢嶸たるを覚えず
夜撥寒灰聽雨聲　　夜に寒灰を撥(か)きて雨聲を聴く

遮眼文書原不讀　眼を遮る文書は原(もと)より読まず
伴人燈火亦多情　人に伴う灯火は亦た多情なり
嗟予潦倒無歸日　嗟(ああ)　予　潦倒として歸日無く
令汝蹉跎已半生　汝をして蹉跎たること已に半生ならしむ
免使韓公悲世事　韓公をして世事を悲しましむるを免れ
白頭還對短燈檠　白頭　還(ま)た短燈檠に對す

夜、灯火のもと、安節と寒灰を掻きまわしながら外の雨音を聞く様子がうたわれる。しとしと降る雨音に寂しさが増し、言いしれぬ悲哀が湧き起こる。黄州に左遷された蘇軾、科挙に落第した安節、二人とも人生の蹉跌の味を噛みしめている。末尾の二句は、韓愈の「短燈檠歌」（『全唐詩』巻三四〇）に「吁嗟世事無不然、牆角君看短檠棄（吁嗟(ああ)世事　然らざるは無し、牆角　君看よ　短檠の棄てらるるを）」というのを踏まえる。韓愈の句は、富貴な生活の中で貧しかった頃に自分を支えてくれた「短燈檠」のことを薄情にも忘れ去った人を諷刺したもの。それを踏まえて蘇軾はいう。かつて韓愈は「短燈檠」が見棄てられるのを嘆いた。だが、私は相変わらず困窮のなか「短燈檠」に向かい合っている。だから、かの韓愈が私を見ても嘆くことはないだろう、と。困窮を脱することができぬ我が身を、韓詩の意を借りつつ自嘲を込めてユーモラスに述べたものである。

第一首は全体として言うならば悲哀をうたった作である。特に第六句までは、詩人はもっぱら悲哀を述べている。しかし、末二句に至ってその姿勢を大きく転じる。ここで詩人は、韓詩を典故に用いたユーモアによって自己を相対化し、悲哀を昇華しようとしているといえるのではないか。続いて第二首を見てみよう。

心衰面改瘦崢嶸　心衰え面改まりて瘦せて崢嶸たり
相見惟應識舊聲　相見れば惟だ應に舊聲を識るべし
永夜思家在何處　永夜　家を思えば何處にか在る
殘年知汝遠來情　殘年　汝の遠來の情を知る
畏人默坐成癡鈍　人を畏れて默坐すれば癡鈍を成し
問舊驚呼半死生　舊を問いて驚呼す　死生を半ばにすと
夢斷酒醒山雨絕　夢斷え酒醒めて山雨絕ゆ
笑看飢鼠上燈檠　笑いて飢鼠の燈檠に上るを看る

第二首では、自分の心身の状態（心力が衰え、容顔が変わり、憔悴した顔色で、身体が痩せこけている状態）を叙述する。長い間会っていない故郷のなじみが自分のことを分かってくれるとしたら、それは「舊聲（お国なまり）」によってだろうと述べる言葉からは、安節と出会ったことで掻き立てられた望郷の念が、手に取るように伝わってくる。第四句にはまた韓愈の詩を用いる。韓愈「左遷至藍關示姪孫湘」（『全唐詩』巻三四四）に「知汝遠來應有意、好收吾骨瘴江邊（知る　汝の遠く来たるは応（まさ）に意有るべし、好し　吾が骨を瘴江の辺に収めよ）」とあるのを踏まえて、悲哀感を醸成する。詩人はこの悲しみから逃れようと、話題を転換して友人の近況を尋ねるが、故郷の友はもう半数しか残っていないという現実に、かえって打撃を受けることになる。

このように本詩は第六句に至るまで悲哀感を正面から訴えるのであるが、しかし第一首と同様、末二句に至って大

きく叙述を転換させる。飢えた鼠が灯火の油をなめようとするのを笑う自分――ここには、ある種の滑稽味が感じ取れる。蘇軾はここで滑稽味溢れる情景を詠ずることによって、悲哀を軽減しようとしているかのようだ。もちろん、第二首が全体としてうたうのは、悲哀の心情である。末尾の「笑」は、詩人の悲哀感を拭い去ることはできない。むしろその陰影をより深くするというべきかもしれない。では最後に、第三首を見よう。

落第汝爲中酒味　落第して汝は酒に中(あた)るの味(あじわい)を爲し
吟詩我作忍飢聲　詩を吟じて我は飢を忍ぶの声を作す
便思絶粒眞無策　便ち思う　絶粒は眞に無策にして
苦說歸田似不情　苦(しき)りに説く　歸田は不情なるに似ると
腰下牛閒方解佩　腰下　牛閒にして方に佩を解き
洲中奴長足爲生　洲中の奴は長じて生を爲すに足る
大弨一弛何緣彀　大弨　一たび弛めば何に縁りてか彀せん
已覺翻翻不受縶　已に翻翻として縶を受けざるを覚ゆ

安節が科挙に落第したことから、困窮する我が身に思いを致す。詩人にとって、道家の養生術は採ることができないが、しかし帰隠もしっくりこないのではないかと生き方に迷いを見せている。そのうえで頸聯には、自分には帰隠の志望があることを説く。「腰下牛閒」は、『漢書』巻八九・龔遂傳の「賣劍買牛」の故事[5]に基づき、官職を抛って農に勤しむことをいう。「洲中奴長」は、三国・呉の孫休の故事[6]に基づき、家計を維持する糧となるミカンの木が成

長することをいう。蘇軾は既に役人生活には未練がないようで、剣を売って牛を買い、ミカンを植えて家計を立てるような隠居生活を過ごそうと考えたのである。

以上を受けて尾聯では、自らを「弦が緩んだ大弓」になぞらえていう。いったん弦が緩んでしまった大弓は、ふたたび緊く張り直すことはできない、と。ここに見て取れるのも、やはり蘇軾の諧謔精神である。本詩において蘇軾は、役人生活に適応できず、そこから排除される自らの運命に関して悲哀を正面から訴えることはしない。第一・二首と同様、ユーモラスな自嘲のなかに悲哀を昇華させるのである。

黄州赴任時の蘇軾にとって、安節の訪問は極めて大きな喜びであったに違いない。だからこそ酒を飲み語り明かしたのである。しかし、その喜びの背後には、当然のことながら詩人の強い悲哀感が横たわっている。右に見た三首には悲哀感を増幅させる語が選んで用いられている。例えば「寒灰」、「雨聲」、「潦倒」、「蹉跎」、「白頭」、「瘦崢嶸」、「殘年」、「飢鼠」、「忍飢聲」など。こうした語を連ねて、詩中には時間が過ぎ去ることへの嘆き、仕途の不順や異郷に身を置くことによる苦悶、加えて友人の死や生活の困窮にともなう辛酸などが表現されている。しかし、蘇軾の詩はかかる悲哀感の詠出に終始するのではなかった。三首の詩は、いずれも末尾二句において悲哀をユーモアへと転化し、昇華する表現がなされていたことに注意すべきであろう。『御選唐宋詩醇』がいみじくも「悲之所發、即其樂之所形」と述べているように、ここでは「悲」と「楽」とが複雑に絡み合い、葛藤する関係にあるのである。

さて『御選唐宋詩醇』において、この三首の詩歌は「冬至日贈安節」詩と情感が一致していると指摘されていた。以上、本節に述べたことを踏まえて、「冬至日贈安節」詩の末二句に見られる悲哀表現について検討してみよう。

三　「詩成却超然、老涙不成滴」句について

「超然」の語は、古くから「高超出衆」「跳過、越過」「豁然」「高貌、遠貌」そして「悵然、惆悵」など、様々な意で用いられてきた。蘇軾の詩に「超然」の用例は全部で十例あるが、常に仙界に関わることがらに用いられ、その多くは「高く抜きん出ていること、俗世を離れること」の意で用いられている。[7] 例えば、「送張安道赴南都留臺」（『合注』巻六）に「我公古仙伯、超然羨門姿（我が公は古の仙伯、超然たり羨門の姿）」、「送張職方吉甫赴閩漕六和寺中作」（『合注』巻七）に「羨君超然鸞鶴姿、江湖欲下還飛去（君が超然たる鸞鶴の姿を羨む、江湖に下らんと欲して還（ま）た飛び去る）」というように。ただし、その一方で蘇軾の文には「超然」を「悵然、惆悵」すなわち「悲しみ、がっかりするさま」の意で用いた例も一例ある。[8]「冬至日贈安節」詩の「詩成却超然」句に見える「超然」は、果たしてどのような意味で用いられているのだろうか。

蘇軾にとって、「超然」の語は特別の意味を有していた。例えば、密州にいた時、蘇軾は台を築き、弟の蘇轍に「超然臺」という名前を付けてもらった。蘇軾はこの名前を非常に気に入っていたらしく、「超然臺記」（『文集』巻一一）の中で命名の由来について「以見予之無所往而不樂者、蓋遊於物外也（以て予の往きて樂しまざる所無きは、蓋し物外に遊ぶならんことを見（あらは）すなり）」と述べている。ここには「遊於物外」とあるが、蘇軾にとって「超然」とはすなわち「遊於物外」とそれに伴う「楽」であったといえよう。これと同様の「超然」すなわち「遊於物外」について述べたものとして、徐州での作「寶繪堂記」（『文集』巻一一）に見える「君子可寓意於物、而不可留意於物（君子は意を物に寓す、べきも、意を物に留むべからず）」という言葉を挙げることもできる。「不可留意於物」は「遊於物外」と同じ「超然」の境地をいったものと考えられる。この他に、黄州時代に書かれた手紙からも、蘇軾の「超

然」を重視する態度を窺うことができる。[9]

以上を踏まえるならば、「冬至日贈安節」詩の「超然」は、やはり他の蘇軾詩や右の「超然臺記」と同様、「高く抜きん出ていること、俗世を離れること」の意であると考える。「冬至日贈安節」詩において蘇軾は、悲哀感に没入するのではなく、自らをかかる心情を超越した「楽」の境地に達した人物として描き出そうとしていた、と考えられるのである。

ただし、「超然」の語が用いられているからといって、蘇軾が実際に「超然」の境地に到達し得ていたと考えることは避けるべきだろう。例えば、保苅佳昭氏が「和魯人孔周翰題詩二首」（『合注』巻十四）に見える「超然」の語について、「超然を標榜しつつも、心は解消出来ずにいる不満、苦悩がわだかまっている」[10]と指摘するように、蘇軾は俗世間を離れ、世俗的な物事にこだわらない状態を求めながらも、実際には容易にはその状態に至ることができなかったと考えるべきではないか。「冬至日贈安節」詩における「超然」の語も、そのような意味合いにおいて解すべきだろう。つまり蘇軾は、悲哀を超越したと表面ではいいながらも、実際にはその背後に逃れられぬ悲哀を感じていたのである、と。

以上、「冬至日贈安節」詩における「超然」の語は「悲哀の超越」という方向で解すべきであることを述べてきた。では、それを受けて述べられる末句「老涙不成滴」はどのような意味に解すべきだろうか。

「老涙」の語は、蘇軾の詩に三つの用例があるが、他の二例はいずれも悼亡詩に用いられたもので、涙が流れる様子を表している。[11]「冬至日贈安節」詩では、その「老涙」について「不成滴」というのだが、冒頭にも述べたように、これについては「涙が流れる」と「涙が流れない」との二つの意味に解釈が分かれる。

「不成滴」の用例は蘇詩以前には見られない。蘇軾より後代の用例を見ると、「水滴を形成して流れる」ことをいう

例もあれば、「流れない」ことをいう例もある。[12] だが、蘇軾詩に見える次の例を踏まえるならば、「流れない」ことをいうと解すべきだろう。

黄州左遷時に蘇軾が創作した「雨中看牡丹三首（其一）」には「霧雨不成點、映空疑有無。於時花上見、的皪走明珠」とあり、「不成點」の用例が見える。この「不成點」は、こぬか雨が霧のように降る様子を描写している。春の雨は靄のように煙る状態にあり、水滴を形成するには至っていないと考えられる。[13]「冬至日贈安節」詩にいう「不成滴」は、この「不成點」と同様の方向、つまり涙が流れていない状態を表現したものと解せるのではないだろうか。また、このように解することによって、前句の「超然」とのつながりもより自然なものとなるように思われる。

なお、ここでは次の点を附け加えておきたい。実は「涙を流さない」方が「涙を流す」よりも、より強く悲哀感を表すことがありうる。『世説新語』に見える「王戎死孝」の故事[14]はそのことを示す好例である。「冬至日贈安節」詩の「老涙不成滴」も、そのような方向で解すべきだろう。先に「超然」について、言葉の表面では「悲哀の超越」をいいながらも、その背後には逃れられぬ悲哀が横たわっていると述べたが、それと同様のことが「老涙不成滴」についてもいえるのではないだろうか。

小結

以上、「冬至日贈安節」詩の「詩成却超然、老涙不成滴」は、「詩を書き終えると、思いがけず世を高く超え出るかのように感じられ、この老いぼれも涙を流すことはない」というような意味で解すべきであることを述べてきた。第二節に述べたように、同時期の「姪安節遠來夜坐三首」に見られるのは、『御選唐宋詩醇』の言葉を用いて言えば

「悲之所發、即其樂之所形」、すなわち「悲」と「楽」とが複雑に絡み合うような心情であった。本詩もそれと同様、「悲」と「超然」の「楽」とが複雑に絡み合う様相を呈している。だからこそ、冒頭にあげたように「詩成却超然、老涙不成滴」についても解釈がさまざまに分かれてしまうのである。

「悲」と「楽」との複雑な絡み合い――このことは、蘇軾の黄州時代の書簡「與杜道源二首」其二（『文集』巻五八）が次のように述べるのにも当てはまるだろう。

九郎兄弟爲學益精、猶復記老朽否。愛孫想亦長進、毎想三人旅進折旋俯仰之状、未嘗不悵然獨笑也。此中凡事如昨。……（九郎どのはますます学問に精進されたことでしょう、老いぼれた私のことをまだ覚えていらっしゃるだろうか。お孫さんたちも成長されたことでしょう、お三方がご挨拶に来て下さった時のことを思い出すたび、今でも悲しくなって、ひとり笑ってしまうのです。あの時のことがすべて昨日のことのように思い出されます。……）

杜道源の子や孫の成長に思いを致したときの感慨を述べている。ここで注目されるのは「悵然獨笑」という表現である。「悵然」たる悲しみと「笑」、二つの相反する方向性が一つに混在し、複雑に絡み合う心情が、一語に集約する形で表現されている。この「悵然獨笑」こそは、拙論で見てきた蘇軾詩の悲哀表現の特徴を言いあらわすにふさわしい語というべきではないだろうか。

［注］

（1）清・查慎行註『蘇詩補註』巻二一「姪安節遠來夜坐三首」の「安節」についての注に「按後『冬至日贈安節』詩云『瞻前惟兄三』。本集『提刑公墓表』所謂『不欺、不疑、不危』也、與公爲從兄弟、安節于三人中、不知爲誰之子。詩又云『見此萬里姪』、則新從眉州來明矣。又『小詩十四首』中云『吾兄喜酒人、今汝亦能飲』、則爲不疑等益信」とある。

（2）以下論文中に引用する蘇軾の詩については清・馮應榴輯注『蘇軾詩集合注』（上海古籍出版社、二〇〇一年、『合注』と略す）、散文については孔凡禮點校『蘇軾文集』（中華書局出版、一九八六年、『文集』と略す）による。

（3）久保天随・岩垂憲德・釈清潭註解『蘇東坡全詩集』（日本圖書中心、一九七八年）巻二一、四〇五頁。

（4）張志烈・馬德富・周裕鍇主編『蘇軾全集校注』（河北人民出版社、二〇一〇年）巻二一、二二九九頁。

（5）『漢書』巻八九「龔遂傳」に、「民有帶持刀劍者、使賣劍買牛、賣刀買犢、曰『何爲帶牛佩犢』」とある。

（6）『三國志』巻四八「孫休傳」の裴松之注に引く『襄陽記』に、「（李）衡字叔平、……衡姪每欲治家、妻輒不聽、後密遣客十人於武陵龍陽汜洲上作宅、種柑橘千株。臨死、敕兒曰『汝母惡我治家、故窮如是。然吾州里有千頭木奴、不責汝衣食、歳上一匹絹、亦可足用耳』」とある。

（7）この他に「大雪青州道上有懐東武園亭寄交代孔周翰」（『合注』巻一五）に「超然臺上雪、城郭山川兩奇絶」、「次韻參寥師寄秦太虚三絶句時秦君舉進士不得」（『合注』巻一七）に「秦郎文字固超然、漢武憑虚意欲仙」、「趙閲道高齋」（『合注』巻一九）に「超然已了一大事、掛冠而去真秋毫」、「冬至日贈安節」（（『合注』巻二一））に「詩成却超然、老淚不成滴」、「再過超然臺贈太守霍翔」（『合注』巻二六）に「超然置酒尋舊跡、尚有詩賦鑱堅頑」、「次韻錢越州」（『合注』巻三一）に「髯尹超然定逸羣、南遊端爲訪雲門」、「送襄陽從事李友諒歸錢塘」（『合注』巻三六）に「髯張既超然、老潛亦絶倫」、「送宋君用游輦下」（『合注』巻四九）に「超然奮躍去、勢若鷹離韝」という。

（8）「書松醪賦後」（『文集』巻六六）に「今將適嶺表、恨不及一別、故以此賦爲贈、而致思於卒章、可以超然想望而常相從也」とある。

（9）「答秦太虚七首」（『文集』巻五二）に「寄示詩文、皆超然勝絶」、「與陳大夫八首」（『文集』、巻五六）に「浮幻變化、念念異觀、閒居靜照、想已超然」、「與上官彝三首」（『文集』巻五七）に「詩篇多寫洞庭君山景物、讀之超然神往於彼矣」とある。

（10）保苅佳昭「蘇軾の超然台の詩詞――熙寧九年に起こった詩禍事件」（『日本中國學會報』、一九九九年、第五一集）七〇頁。

（11）「蘇潛聖挽詞」（『合注』巻一四）に「惟我閒思十年事、數行老淚寄西風」、「去歳九月二十七日、在黄州生子遯、小名幹兒、頎然穎異、至今年七月二十八日病亡于金陵、作二詩哭之」（『合注』巻二三）に「歸來懷抱空、老淚如瀉水」とある。

（12）北宋・李彌遜の「六月四日飯石門風雷大作而雨不成滴戲以詩趣之」（『筠谿集』巻一二）の場合は、詩に「雨華如棼絲、熟視乃不見」とあるので、「水滴を形成しない」例である。王之道「彥嘉通守當今之俊偉人也余心向慕之……（其二）」（『相山集』巻一）に「簷聲決江河、傾瀉不成滴」とあるのは、「多く流れる」例。南宋・楊冠卿の「秋懷十首微雲淡河漢疎雨滴梧桐為韻（其八）」（『客亭類稿』巻一一）に、「晚雲蹔垂陰、零露不成滴」、明・史鑒「送節推華公謫官」（『西村集』巻二）に「浮雲忽歸山、霖雨不成滴」とあるのは、いずれも「水滴を形成しない」例であろう。

（13）杜甫「雨不絶」（『全唐詩』巻二二九）には「鳴雨既過漸細微、映空搖颺如絲飛」とあって、同様の雨の姿を描写する。

（14）『世説新語』德行に「王戎、和嶠同時遭大喪、俱以孝稱。王雞骨支牀、和哭泣備禮。武帝謂劉仲雄曰『卿數省王、和不。聞和哀苦過禮、使人憂之』。仲雄曰『和嶠雖備禮、神氣不損。王戎雖不備禮、而哀毀骨立。臣以和嶠生孝、王戎死孝。陛下不應憂嶠、而應憂戎』」とある。

（大学院研究生）

SUMMARY

論黃州時期蘇軾悲哀感的表現

——以“詩成却超然，老淚不成滴”爲線索

趙 蕊蕊

元豐二年，蘇軾因寫詩諷刺王安石新法主張，被貶黃州。元豐四年十一月，科舉失意的姪子安節於回蜀途中繞道黃州前來探望，常與蘇軾飲酒夜坐，交游賦詩。《冬至日贈安節》即此期間蘇軾贈與安節的詩歌。詩以“詩成却超然，老淚不成滴”結束全篇，傳達給讀者豐富及不確定的情感想象，不同學者對此二句也持有異議。本文將就此問題展開論述，通過分析蘇軾與安節交往的詩歌創作，發現其在抒發情感時，內心常常形成兩種完全相反的情感趨向。這兩種情感趨向交叉融合，以“悲歡一體”的方式呈現給讀者。本論文將著重闡釋詩中“超然”，“不成滴”的含義，進而探究其作品中詩人在面對挫折時體現的超然精神及其立身處世時採取的人生態度，並以此為基礎深入探討蘇軾悲哀情感的表達方式。